『魂を込めたフットボールの継承者』

—どのような経緯でキャプテンに

「全体でミーティングして、全員が案をだした時に自分はこのチームの中心でやっていきたいと強く思ってて、立候補的な感じで言ったら、周りも『覚悟できてるならやっていいよ』『ダメな部分はサポートするから』って推してくれて、そういう流れから決めました。並大抵のことじゃないけど、自分のことは責任持ってやろうと決めたんで。中学の時は生徒会長や学級委員をやっていたんですけど、主将は人生初ですね。正直、初めてだから不安な事はいっぱいあるけど、自分の性格は前向きだから失敗を恐れず『ダメな部分はダメで、すぐ切り替えてやろう』と取り組んでいます」

—どういう部分から主将をやりたい気持ちになりましたか

「キッカケは2年生から試合の経験とかもしてて、去年もタイトルとれなくて自分のミスで負けてしまったのもあった。そういう意味でも去年の雪辱を晴らしたいし、このチームを本当に立て直したいって強く思ったところからです」

ベンチにも入れず、スタンドでの観戦になった時も、鈴木は仲間のために声援を送り続けてきた。

他者への大いなるリスペクトを忘れず、常に誰かの為に闘える感覚。大袈裟な表現かもしれないが、これは努力し続ける者にしか与えられない才能だ。

「最後の年だし、タイトルとりたいのが一番なんですけど、主将という立場になって凄く思うのは、駒澤大学のサッカーというのを後輩達に『継承』させたい」

—継承させたいとは？

「がんばってあきらめないでひたむきにやるとか、見ていて感動させる試合・練習・態度。人間的にも成長させられるようなチームにしていきたいです」

—そういう面を教えて下さる秋田監督の存在は大きい

「監督は、そこにいるだけでチームの雰囲気が変わる。けど、今年は大学選抜の監督にもなったから、こっちにいる時期が少ない。『本当に今年は自主性を求めていかないといけない』って監督にも言われている」

—自分たち次第の環境になっているということですか

「はい。でも、ここで自分たちが本当に高い意識を持たないといけないのは、ある意味で成長できるチャンスなんで。しっかりやらなければいけないと思ってます」

—つまり今年はタイトルを掴みにいく感覚

「そうですね。でも気持ちばかりでも、現実を見たら2部に落ちるかもしれない実力なので。難しいんですけど、現実的な判断も必要になってくる」

—去年はすごく前評判があったが、今年はない

「今年は完璧なチャレンジャー。周りの学校からもコーチとかから『今年の駒大は倒せる』って話は聞かされているし、みんなも知ってるので。そういう言われ方するのは悔しいからこそ、やってやるって気持ちでいます」

昨年まで、試合に出場する選手の大半を占めていた卒業生が去った。実力の世界とはいえ、下の学年から這い上がってくる選手が少なかったチーム状況は、やがて気がつかないところで何かの亀裂を生む。監督はそれを「慢心だ」と表現した。亀裂は、選手の創造性あるプレーまでをも奪った。今年から出場する選手に、経験不足を指摘する声も少なからずある。しかし、鈴木が鼓舞し続けてきたチームには、確実に何かが芽生え始めている。

「自分が試合を経験している分だけ、練習を見てると『これじゃマジでまずいな』とか思うけど、去年だったら紅白戦でトップチームに勝てたりするのが多かった。出たら個々の能力が高い選手もいるから、頑張れると思う。俺、島田、中山、ヤマケン（山崎健太）、伊藤とかが試合で上手く伝えられたら早く馴染むと思います」

—カギを握る選手は

「うーん。やっぱり期待しているのは…島田、かな。1年生の時から試合に出てるし、良いモノ持ってるし、やっぱりアイツが攻撃の中心になると思うんで。それと（山下）慎太郎ですね。なかなか試合に出られなかった時があっても腐らずにやってて。ゴール前とかメチャメチャ上手い。それに頑張る意識も、気持ちの面でもすごく変わってると思うから期待してますね。その2人は特に。守備は俺・安藤・伊藤・武田などがしっかりやっていくんで、攻撃はそいつらに任せれば、良い結果が出ると思う」

—にぎやかだった3年生が4年生になる

「今日も練習試合で負けちゃったけど、みんなすごい悔しんだり、チームへの熱い気持ちも伝わってきた。でも、上の学年が悔しがるのはたぶん当たり前なことで、1・2年生がどう感じるか。例えば、明らかにタッチラインを割りそうなボールを頑張って追いかけてスライディングする姿に、『ナイスプレイ！』と言い合えるようなチームにしたい。それを共有できるのが駒大の良いところであって、なんていうのかな、ひたむきに最後まで諦めないで頑張るっていう大切さ。それを伝えられたらチームは確実に強くなる。選手層の部分では、今年は1・2生からの力も絶対に必要になってくる。『自分がやらなきゃいけない』って意識を何人かわかってくれる人がでてきてる。それはこっちも凄く助かってて、もっと伝えていかなきゃと思っています」

—良い面もたくさんある

「一人一人がやろうとするとか、一生懸命やってない選手がいたら誰でも『やれよ』ってコミュニケーションをとれてることが最大の武器。チームを1つにするのはそれしかないんで。今年は本当にピッチに立ったら上下関係とか学年関係なくやっていきたい。けど、逆にそれを穿き違えようにしないといけない」

—毎試合、応援もすごいですよね

「やっぱり『応援してくれる人のために頑張ろう』って気持ちになる。一人でも多く公式戦に出たら『みんなのために』ってなってくれるかもしれないし、少なくとも俺はそうだった。一番成長するには試合に出ること。そういうのを全部ひっくるめて駒大サッカー部だと思うから。試合に出る人は応援のありがたさを感じてサッカーしてもらいたい」

練習試合では、試合を重ねるごとにチームの完成度が高まってきている。試合後、選手たちがゴール裏で車座になり、自主的にミーティングをするなど、去年では見かけることの少なかった場面も頻繁に増えた。

—すごく仲が良さそうですね

「良いっすね。それをパワーにしたい。でも仲良し集団にならないように」

—つまり仲間

「良いこと言ったね！（笑）。それ！実際、練習中はみんな厳しいことも言い合えるから一体感もできるし、『一緒にやってるな』と感じる」

—今までちょっと不安だったけど、これまでの話を聞いてて安心してきました。今年は「ロスタイムの歓喜」とタイトルをつけられる試合がありそうな気がします

「そういう雰囲気を起こせる選手が今年は多い。田村とか今日の試合だったらパスミスとかあるけど、前からプレッシャーかけて本当に頑張る」

—気になる背番号は

「サプライズありますよ（笑）。期待も含めて、そいつの存在なくしてチームの成長ないみたいなのもある。俺は3番ですね。みんなが『3番だろ』って雰囲気で。本当は6か7が良かったんですけどね（笑）。でも、試合に出たら番号なんて関係ないんで、やるだけです」

彼の中に流れているもの。絶対に忘れてはならないこと。それは正に駒大サッカーだった。インタビューが終盤へ近づくにつれて、彼の表情が明るくなったのは、きっと芝生の上で暴れる自分の姿を思い描いていたからだろう。

今まで培ってきた経験と熱意。そして、針の穴へ細い糸を1本1本通すように、丁寧に時間をかけて結び付けてきたチームとしての結束力。強豪の死角を突くための武器は揃った。もう迷うことはない。リベンジのシーズンが来た。■

EL CORAZON FUTBOL